

第一章 朱雀院の物語 女三の宮の婿選び

[第一段 朱雀院、女三の宮の将来を案じる]

*朱雀院の帝(しゅじゃくゐんのみかど、朱雀院に於かせられては)、*ありし御幸ののち(十月二十日過ぎの六条院行幸の後)、そのころほひより(以来ずっと)、*例ならず悩みわたらせたまふ(体調を崩されて臥せっていらっしやいます)。*「朱雀院の帝」の「帝」は原文なのだろうか。だとしても、帝位は退いたのだから意味は「御門」で<御方に於いては>だ。いや、「みかど」は元々が<御方に於いては>なのであり、その常套句化で「帝位」を示すようになったのだろうが、紛らわしい。*「在りしみゆき」は注に<朱雀院、十月二十日過ぎの六条院行幸(藤裏葉、第三章五段)の後、病状が続く。「せ」「たまふ」最高敬語。>とある。*「れいならず」は<くいつもとは違う>で、常態でないことからだろう<か病気だ>という意味にもなる、と古語辞典にある。

もとよりあつしくおはしますうちに(元々御病気がちでいらっしやる所に)、このたびはもの心細く思し召されて(今回はとても気弱に御思いなさって)、

年ごろ行なひの本意深きを(年来の念仏勤行暮らしの本意である出家願望の深さを)、*後の宮おはしましつるほどは(弘徽殿太后が御存命中の時は)、よろづ憚りきこえさせたまひて(出家に抛る御家の威光消滅をとにかくはご遠慮申し上げなさって)、今まで思しとどこほりつるを(今まで御決心なさらずにいらしたのを)、なほその方に*もよほすにやあらむ(今やその思いに突き動かされてのことだろうか)、*「きさいのみや」とは朱雀院の母后でかつての弘徽殿女御たる太后のことだろうが、此処の記事で既に亡くなっている事が知れる。が、以前に亡くなったとの記事は無かったかと思う。五年前の仲春二月二十日過ぎに今上帝の朱雀院行幸があり、少女巻七章二段に朱雀院内の柏梁殿に住まっていたらしい弘徽殿太后を帝は源氏殿と共に見舞っていて、その時点でだいぶ老い衰えているかの記事はあったが、瀕死ではなかった。時に帝 16 歳、源氏殿 34 歳、朱雀院 37 歳、弘徽殿太后 57 歳くらい、のこと。その後の初音巻三章一段に男踏歌一行が「朱雀院の後の御方などめぐりけるほどに夜もやうやう明けゆけば」とあったので、その時には存命中だったことが知れる。初音巻は六条院完成後の初春の栄華の様子で、ほぼ丸三年前の源氏殿 36 歳の時の話だ。その翌年、とは今から二年前の八月二十日に藤原家の大宮が亡くなったが、その記事もその時点ではなく、今年の八月が三回忌だったと知らされた。そして、その年の九月なのだろうか、急展開で対の姫が右大将の手に落ちて、源氏殿もその婚儀を認めざるを得なかったが、肝心の急展開自体の記事がなく、藤袴巻で対の姫の十月尚侍出仕の運びの記事のまま、次の真木柱巻では冒頭から既に結ばれた右大将に源氏殿が暫しの口外無用を諭す場面に移っていて、私はこの間の脱稿を強く疑うが、この間に弘徽殿太后が逝去したのなら、大宮と同年の命日となり、今年が太后の三回忌という語りが無いことからして、それも考え難い。また、朱雀院が実母の一年服喪を務めたとして、今上帝にとっても源氏殿にとっても弘徽殿太后は公式には桐壺院の筆頭妃だったので敬慕すべき継母であり、今年の十月二十日が忌明けでなければ、とても行幸は出来なかつたらうから、可能性としては今年の秋以前が最も高そうだ。そう言えば、真木柱巻では四章で今年の三月の話があり、五章で十一月に対の姫の男子出産へと話が飛んでいて、夏と秋の話が無かった。弘徽殿太后の存在感は大きく、藤原右家の実権勢は東宮の母后に移ったとはいえ、その象徴性は朱雀院と共に今なお重きを成して、その去就は多くの読者の関心事だろうに、少なくとも私には気懸かりだったが、省筆は不服だし、恐らくは脱稿だ。*「もよほす」は生理現象のような個人的に自分が<何かをせずには

居られない思い>で、朱雀院自身の思いだ。で、此の文の敬語省略は内心付度による語り手の弁で、朱雀院の言葉としては次の一文のみとしたい。

「世に久しかるまじき心地なむする(遠からず出家する心算だ)」などのたまはせて(などと仰って)、さるべき御心まうけどもせさせたまふ(そのための下準備を進めなさいます)。

御子たちは(院の御子たちは)、春宮をおきたてまつりて(東宮を別にお置き致し申して)、女宮たちなむ四所おはしましける(女子を設けた御部屋様というのが四箇所御座いました)。

その中に藤壺と聞こえしは(その中で藤壺と申し上げた御方様は)、*先帝の源氏にぞおはしましける(先帝の内親王が臣籍降下して源氏姓になっていらした方なので御座いました)。*「せんだいのげんじ」は注にく「先帝」は「桐壺」巻に「先帝の四の宮」云々と見えた帝。藤壺の異腹の「源氏」にあたる。「ぞ一ける」係結び。>とある。「先帝の四の宮」とは故藤壺入道宮のことで、同じ藤壺とは紛らわしいが、この御部屋様は朱雀院が帝位にあった時に藤壺を使っていた朱雀帝の女御のことで、藤壺入道宮とは異腹妹にあたる臣籍降下していた先帝の娘、ということらしい。厭に成るほど面倒な近親関係の説明方法だ。個人名を挙げて客観的に説明しろ、って言いたくなる。

まだ*坊と聞こえさせし時参りたまひて(その御方様は院がまだ皇太子と申しなさった時に参内なさって)、高き位にも定まりたまべかりし人の(御血筋からすれば後の地位に就かれても良い人であったものの)、取り立てたる御後見もおはせず(父親の死後は取り立てて有力な後見人もいらっしゃらず)、母方もその筋となく(母方も藤原本流に列せず)、ものはかなき更衣腹にてものしたまひければ(非力な更衣身分のまま子で設けなされたので)、御交じらひのほども心細げにて(その子の祝い事での客への接待も型通りの公費分以上のものは賄えず)、大后の(おほきさきの、弘徽殿大后が)、尚侍を参らせたまつりたまひて(異母妹を尚侍に出仕させ申しなさって)、かたはらに並ぶ人なくもてなしきこえたまひなどせしほどに(実質の帝妃として他に張り合える者が無いほどに豪勢に飾り立て申しなさったので)、気圧されて(萎縮させられて)、帝も御心のうちに(朱雀院も在位中には内心で)、いとほしきものには思ひきこえさせたまひながら(何とか御方を厚遇したいと思って申し聞かせなさりながら)、下りさせたまひにしかば(手立ての立たぬまま退位なさってしまったので)、かひなく口惜しくて(藤壺御方は情けなく口惜しくて)、世の中を恨みたるやうにて亡せたまひにし(天領が莊園に襲われる悲哀を身を以て実感して、世の趨勢を恨むようにして亡くなったのでした)。*「坊」は元々は「春宮坊(とうぐうぼう)」のこと、と古語辞典にある。「春宮坊」は皇太子に仕えた独立した役所のことで、他に「坊」と称する司が無かったので「坊」と言えば「春宮坊」を意味し、延いては皇太子自身を意味したようだ。

その御腹の女三の宮を(その藤壺御方腹の三番目の内親王にあたる娘を)、あまたの御中に(他の娘たちに増して)、すぐれてかなしきものに思ひかしづききこえたまふ(最も愛しい者に思って院は大事に御育て申しなさっています)。そのほど(その女三の宮の年頃は)、御年(今年で)、十三、四ばかりおはす(13,4歳でいらっっしゃいます)。

「今はと背き捨て(今こそと世に背を向けて俗世を打ち捨てて)、山籠もりしなむ後の世にたちとまりて(山籠りしようかという私の出家後に俗世に残って)、誰を頼む蔭にてものしたまはむとすらむ(この姫は誰を頼りに暮らせば良いのだろう)」

と、ただこの御ことをうしろめたく思し嘆く(ただこの事だけを朱雀院は心配して嘆きなさいます)。

西山なる御寺造り果てて(院は西山というお寺を完成させて)、移ろはせたまはむほどの御いそぎをせさせたまふに添へて(移り住みなさるご用意をおさせあそばすのに加えて)、またこの宮の御裳着のことを思しいそがせたまふ(またこの宮の御裳着のことをお考えになって準備させなさいます)。「にしやまなるみでら」は注に<仁和寺が想定されている。>とある。仁和寺は<京都市右京区にある真言宗御室(おむろ)派の総本山。山号は大内山。宇多天皇が光孝天皇の志を継いで仁和4年(888)完成。讓位後、益信を戒師として出家、一字を設け御座所として住んだので、御室御所と称した。のち、門跡寺院として代々法親王が入寺。金堂は寛永年間(1624~1644)に紫宸殿を移築したもの。平安時代作の本尊阿弥陀三尊像や「三十帖冊子」「医心方」をはじめ、多数の文化財を所蔵。平成6年(1994)「古都京都の文化財」の一つとして世界遺産(文化遺産)に登録された。御室仁和寺門跡。>と大辞泉にある。「御願寺」発願者は光孝帝だが「西山御願寺」建立者は宇多帝とあり、宇多帝が退位後に出家してこの寺に住持して以来、明治維新(1868)まで王家が住持を務めていたという由緒と、現在の金堂が寛永前の皇居の紫宸殿であり、仁和寺御室会館に宿泊するとその国宝の金堂の朝の勤行に参加できるというギリギリ感が嬉しい一寸した奇跡の寺だ。今に繋がる組織継承には際どい局面もあったかも知れないが、観光事業を主要な柱に位置付けているかの潔さは好感する。

院のうちにやむごとく思す御宝物(院の内にこの上なく最上にお考え為さる)、御調度どもをばさらにもいはず(御装飾類をば更にも言わず)、はかなき御遊びものまで(日用の御道具類まで)、すこしゆゑある限りをば(少し由緒のあるものであれば)、ただこの御方に取りわたしたてまつらせたまひて(この姫だけに継承申しなさって)、その次々をなむ(それ以下のものを)、異御子たちには御処分どもありける(異なる御子たちには御分配品としてお与えなされたのです)。

[第二段 東宮、父朱雀院を見舞う]

春宮は(皇太子は父院が)、「かかる御悩みに添へて(このような御病状に加えて)、世を背かせたまふべき御心づかひになむ(出家なされる御意向のようです)」と聞かせたまひて(と側近からお聞きあそばして)、渡らせたまへり(お見舞いに朱雀院にお出向きなさいました)。*母女御(母君の女御も)、添ひきこえさせたまひて参りたまへり(ご一緒申しなさって参院なさいました)。すぐれたる御おぼえにしもあらざりしかど(院はこの皇太子の母君に特に深い愛情をお持ちではなかったが)、宮のかくておはします御宿世の(御二人の間の子がこうして次帝に予定されていたという尊い御宿縁が)、限りなくめでたければ(この上なく喜ばしいものだったので)、年ごろの御物語(長年の四方山話を)、こまやかに聞こえさせたまひけり(こまごまとお話し申しあそばしました)。*「母女御」はかつての承香殿女御で朱雀院在位中の第一妃だった。夕顔の忘れ形見だった対の姫を娶った右大将の同腹姉で、恐らくは弘徽殿大后の同腹弟君の娘で、朱雀院とは従兄妹にあたる血筋だった、かと思う。院に熱愛されていなくても精神の均衡を保てるのは、正に東宮の母として政局の要に位置するという垂らし込みの自負と、寵愛の相手が叔母筋の尚侍で何れ藤原右家の手の内だという安心感にあるか。で、右大将が藤

原右家筆頭なのもこの女御が東宮の母君であることに拠るのだろうし、それこそが院を奉る勢力であることを意味している。次期政権を約束されている藤原右家は基本的に安泰で繁栄が期待できるが、朱雀院の懸念は現有勢力として無視出来ない藤原左家との今後の調整をどう図るか、だったのだろう。東宮の軸足が右家なのははっきりしているし、他の三人の姫たちも右家に繋がる家筋で安泰なのだろう。事実上の院の手駒は三の宮だけだったのかも知れないが、是を右家に預ければ当面の安泰は図れるが、余りにも偏った右家偏重は、莊園拡大が実勢の時代背景にあっては、却って実力での左家の独立性を促してしまい、傍若無人な勝手な振る舞いを左家に許しかねない。かと言って、迂闊に左家に姫を預ければ、姫自身が反目の渦中に身を置かされて不幸に終わるかも知れない。可愛い娘だけに院は逡巡する。といった所が、この幕の舞台背景のようだ。

宮にも(院は東宮にも)、よろづのこと(いろいろなこと)、世をたもちたまはむ御心づかひなど(世の中を上手く治めなさる際の御注意点などを)、聞こえ知らせたまふ(教え申しなさいます)。*御年のほどよりはいとよく大人びさせたまひて(皇太子は御年の割にはだいぶ落ち着いていらして)、御後見どもも(後見勢力も)、こなたかなた(母君の父方母方共に)、軽々しからぬ仲らひにもものしたまへば(有力なお家柄でいらしたので)、いとうしろやすく思ひきこえさせたまふ(とても安心できると思い申しなさいます)。*皇太子は13歳。女三の宮と同じ年だ。別腹ながら院の逞しさが窺える。

「*この世に恨み残ることもはべらず(出家するに当たって、今までの人生に悔いはありません)。*注に<以下「うしろめたく悲しくはべる」まで、朱雀院の詞。最初「この世に恨み残る事もはべらず」と言いながら、最後は「いとうしろめたく悲しくはべる」と矛盾したことを漏らす。>とある。ただ、後ろの「うしろめたく悲しくは」は「うち捨ててむ後の世(出家した後)」の三の宮の庇護者が定まっていなかったことへの懸念なので、此処の「この世に恨み残ること」を<出家するに当たっての遣り残した思い=是までの成り行きを無念に思う気持ち>と取れば、未来への不安はあっても自分は悔いなく修行に打ち込める、ということを行っているように思えて、必ずしも矛盾しないのかも知れない。良く分からないので、何一つ断言は出来ないが、恐らく仏門修行は「人事を尽くして天命を待つ」といった因果応報律とは別次元の概念なのだろう。過去と未来は繋がっているし、未来は未確定なので多くの場合は、明日を少しでも有利な条件で迎えるべく現在に於いてより多くの果実を得るを期して努力する、という因果律は分かりやすい。だから当文を「矛盾」と指摘するのは尤もにも見える。が、読経勤行は善行を積んで自分の成仏を願う、という方法を示していて、それが単に利己的な独善で終わらないのは、自分の良縁を願うことで自分に繋がる後世の全ての縁者の幸福を願うことに成るからなのだろう。言ってみれば「読経」は、一族の繁栄を願うという利己主義では有るのかも知れないが、「福音」を漠然と概念するだけでなく自分の存在を通して理想社会の実現を願う「具体的な」方法、という認識のようだ。いや、私自身はとてそれが現実的な解決法とは思えないが。

女宮たちのあまた残りどどまる行く先を思ひやるなむ(ただ、まだ女宮たちが多く居残っていてそれらの落ち着き先を思い遣ると)、*さらぬ別れにもほだしなりぬべかりける(死ぬに死ねない心残りにも成りかねません)。*「さらぬ」は「避らぬ」で<避けられない>であり、「避らぬ別れ」は<死別>と古語辞典にある。「ほだし」は<足かせ>なので「さらぬ別れにもほだしなりぬ」は<死ぬに死ねない心残りになってしまう>。そう言えば、院は出家願望の他に、長患い気味でもあった。

*さきざき(以前に)、人の上に見聞きしにも(他人の身の上話として聞いた話にも)、女は心よりほかに(女は自分の意志では無くても)、あはあはしく(事の経緯次第で軽々に)、人におとしめらるる宿世あるなむ(世間から悪口を言われる運命にあるというのが)、いと口惜しく悲しき(と

ても無念で可哀相だ)。 *「さきざき」は「前前」で<以前は>の意、と古語辞典にある。今だと「先々」は<行く末、のちのち>だから、逆だ。ただ「先月」と言えば、今でも<来月ではなく前月>のことだが。

いづれをも(どの女宮も)、思ふやうならむ御世には(あなたが即位なさった暁には)、さまざまにつけて(何かにつけて)、御心とどめて思し*尋ねよ(お心遣い下さり面倒を見て下さい)。 *「たづぬ」は<見舞う=贈り物をする=援助する=世話する>。

その中に(女宮の内)、後見などあるは(後援者がいる者は)、さる方にも思ひ譲りはべり(そちらへお任せしても良いと存じます)。三の宮なむ(三の宮ですが)、いはけなき齡にて(幼くして母に死に別れ)、ただ一人を頼もしきものとならひて(私だけをただ一人の後ろ盾として慣れ親しんできて)、うち捨ててむ後の世に(私が離俗した後に)、ただよひさすらへむこと(身寄りを失って漂い流離うのが)、いといとうしろめたく悲しくはべる(それはもう心配で可哀相です)」。

と、御目おし拭ひつつ(院は涙を押し拭いながら)、聞こえ知らせさせたまふ(皇太子に説明申しあそばします)。女御にも(母君の女御にも)、*うつくしきさまに聞こえつけさせたまふ(よく面倒を見てくれるように申し付けあそばします)。 *「うつくし」は「いつくし」と同じで、本来は<大事に育てるもの、かわいがるもの、いたわって世話をするもの>という語義で、転じて<美しい、立派だ>を意味する、と古語辞典にある。

されど(しかし)、*女御の(三の宮の故母君が)、人よりはまさりて時めきたまひしに(院の在位中には他の妃より勝って寵愛されなさっていて)、皆挑み交はしたまひしほど(当時の妃たち皆が競い合いなさっていた中で)、御仲らひども(それぞれの間柄は)、えうるはしからざりしかば(とても仲良くはなかったのも)、その名残にて(その影響で)、「げに(実に)、今はわざと憎しなどはなくとも(今は特にその娘である三の宮に憎しみなどは無くても)、まことに心とどめて思ひ後見むとまでは思さずもや(この東宮の女御が本当に親身になって女宮を世話しようとはまでは思わないかも知れない)」とぞ推し量らるるかし(と院には推し量られなさっていたようです)。 *「女御」は注に<女三の宮の母女御藤壺をさす。>とある。直前に<東宮の女御>を「女御」と呼んでいて、今は<女三の宮の母>のことを同じ「女御」と呼ぶとは、如何にも分かり難い。なぜ、「三の宮の母女御」とか「女宮の故女御」とか言えないのか。主語の分かり難さは此処に限らないが、是は特に酷い。注釈が出るほど分かり難い語用だが、注釈が在っても書き手の自覚の無さは気に成る。

朝夕に(朝に夕に院は)、この御ことを思し嘆く(このこと一つを思い嘆きなさいます)。年暮れゆくまに(年の瀬が迫るほど)、御悩みまことに重くなりまさらせたまひて(御病状が真に重くなり進みなさって)、御簾の外にも出でさせたまはず(お部屋を出ることも為さいません)。御もののけにて(熱病に浮かされて)、時々悩ませたまふこともありつれど(時々お加減の悪くお成りあそばす時は以前にも在ったが)、いとかく*うちはへをやみなきさまにはおはしまさざりつるを(これほどに病状がずっと続くのを止むこと無いままにいらっしゃって来たので)、「このたびは、なほ限りなり(今回はいよいよ最後に違いない)」と思し召したり(と御思いになっただけにいらっしゃいました)。 *「うちはへ」は「打ち延へ」で、「打ち延ふ(打ち続く)」の連用中止であり、連体中止の「打ち延ふる(ずっと続いたこと)」ではなく、その動向自体が<ずっと引き続いていること>の意。

御位を去らせたまひつれど(帝位を御退きあそばしたが)、なほその世に頼みそめたてまつりたまへる*人びとは(尚も在位中にお引き立て頂きなされた有力者の人びとは)、今もなつかしくめでたき御ありさまを(今でも親切で御立派な院の御姿を)、心やりどころに参り仕うまつりたまふ限りは(心の支えにお見舞いに参上して御仕え申す者にあつては)、心を尽くして惜しみきこえたまふ(心底から御不調を惜しみ申しなさいます)。 *「人びと」は敬語遣いになっている。が、帝と母君にしては二重敬語になっていないし、「限りは(限った者にあつては)」という一定範囲を示す言い方からしても政府上層部の高官あたり、具体的には藤原右家の面々に思えるが、どこまで言い換えたものか良く分からない。

[第三段 源氏の使者夕霧、朱雀院を見舞う]

六条院よりも(六条院からも)、御訪らひしばしばあり(お見舞いの御品がしばしば届きます)。みづからも参りたまふべきよし(次回には、源氏殿御自身もお見舞いに参上なさる由を)、聞こし召して(お聞きあそばして)、院はいといたく喜びきこえさせたまふ(朱雀院はそれは殊の他に喜び申しあそばします)。中納言の君参りたまへるを(今回の使者として、中納言の源氏君が参上なさっているのを)、御簾の内に召し入れて(院はお部屋の中に招き入れなさせて)、御物語こまやかなり(昔話を親しくお話しいたします)。

「故院の上の(故桐壺父院が)、今はのきざみに(今わの際に)、あまたの御遺言ありし中に(いろいろと御遺言のあった中に)、この院の御こと(そなたの父君の六条院の御事と)、今の内裏の御ことなむ(今上帝の御事とを)、取り分きてのたまひ置きしを(特別に申し置かれ為されたのを)、公けとなりて(帝位にあつては朝廷として諸般を治める政務上)、こと限りありければ(私情は制約されるので)、うちうちの御心寄せは変らずながら(私自身の御親愛は変わらないものの)、はかなきことのおやまりに(ちょっとした行き違いに)、心おかれたてまつることもありけむと思ふを(六条院が気を悪くされることもあったかと思うのに)、年ごろことに触れて(この何年の事あるごとにも)、その恨み残したまへるけしきをなむ漏らしたまはぬ(そのわだかまりを残していらっしやる素振りさえお見せになりません)。

賢しき人といへど(賢人と言つても)、身の上になりぬれば(自分のことになると)、こと違ひて心動き(話が違って動揺して)、かならずその報い見え(先ず報復を考えて)、ゆがめることなむ(道理の正誤を歪める事というのが)、*いにしへだに多かりける(昔でさえ多くありがちだったので、六条院はそうではいらっしやいません)。 *「古だに」は注にく「だに」副助詞、できえの意。『完訳』は「聖賢の世の昔でさえ多いのだから、まして人心荒廢の現代では」と訳す。>とある。従つて、恐らくは「を院は然に在らせ給はず」なのだろう、と省略文を補語する。

いかならむ折にか(何かの折にかは)、その御心ばへほころぶべからむと(そうした意趣返しのお意向も頭れることだろうと)、世の人もおもむけ疑ひけるを(世の中の人にも注意して疑っていたが)、つひに忍び過ぎたまひて(とうとう自重し切りなさせて)、春宮などにも心を寄せきこえたまふ(我が御子の皇太子などにも懇意をお示しなさせていらっしやる)。今はた(今や互いの子供同士が)、またなく親しかるべき仲となり(またとなく親しむべき夫婦の仲となり)、睦び交はしたまへるも(仲良くしていらっしやるというの)、限りなく心には思ひながら(この上なく喜ばしいことと心には思いながら)、本性の愚かなるに添へて(私が生来の愚かさに加えて)、子の

道の闇にたち交じり(我が子可愛さに目が眩み)、かたくななるさまにやとて(源氏姫ばかりを偏重して傍目に見苦しい様になってはいけないと考えて)、なかなかよそのことに聞こえ放ちたるさまにてはべる(あえて他人事のように申して母親任せにしております)。

内裏の御ことは(今上帝については)、かの御遺言違へず仕うまつりおきてしかば(故父院の御遺言通りに譲位申し上げたので)、かく末の世の*明らけき君として(こうしてこの末世の賢君として)、来しかたの御面をも起こしたまふ(私の面目まで立たせて下さっていらっしゃる)。本意のごと(本意が適ったことと)、いとうれしくなむ(とても嬉しいです)。 *「あきらけし」は<明白だ、賢明だ>と古語辞典にある。「明らけき君」は<賢君、名君>。

*この秋の行幸の後、いにしへのこととり添へて(昔のことがあれこれと思い出されて)、ゆかしくおぼつかなくなむおぼえたまふ(懐かしく六条院に御会いしたく存じます)。 *「この秋の行幸」は注に<源氏三十九歳十月の六条院行幸をさす。十月は陰暦では冬になるが、太陽暦では立冬前日までが秋である。当時は太陰暦と太陽暦との二元的暦法に立つ季節感である。>とある。因みに今年 2011 年の立冬は 11 月 8 日で先週の火曜日だった。今年の 11 月は暖かいが、この日は平年並みに寒かった。現在の日本人の感覚からすれば、この「この秋の行幸」は分かり易いが、その<分かり易さ>が変だ。例えば、新月から新月までの間、とは月の公転周期(自転も同じ 27.3)+地球の公転移動分の太陽光反射に拠る見かけの新月位置(2.2)で約 29.5 日だが、陰暦では十月の中気とされる「小雪」の 15 日前が「立冬」なので、「神無月の二十日あまりのほどに六条院に行幸あり」(藤裏葉巻三章四段)の日付が「立冬」前だというのは考え難い。かといって、この「神無月」が丸々太陽暦の 10 月を指しているとしたら、「二十日あまり」は月齢を示していないことになる。日付が月齢を示さないと電気照明のない時代の夜の情景は見えないが、夜の描写は無かったから問題は無いのだろうか。しかし混乱する。

対面に聞こゆべきことどもはべり(対面して申し上げたいことがあります)。かならずみづから訪らひものしたまふべきよし(ぜひ御本人に訪問して頂きたい旨を)、もよほし申したまへ(お勧め申して下さい)」

など(などと朱雀院は源中納言に)、うちしほたれつつのたまはず(元氣なく仰います)。

[第四段 夕霧、源氏の言葉を言上す]

中納言の君(中納言の源君は)、

「過ぎはべりにけむ方は(昔のことは)、ともかくも思うたまへ分きがたくはべり(どうにも考えようもなく私には分かりません)。年*まかり入りはべりて(長じまして)、朝廷にも仕うまつりはべるあひだ(政府にも勤めております此の頃)、世の中のことを見たまへまかりありくほどには(世事を見歩き申す内の)、大小のことにつけても(ことの大小ごとの訓えや)、うちうちのさるべき物語などのついでにも(親子内での経緯話などの際にも)、『*いにしへのうれはしきことありてなむ(昔に辛い思いをしたことがあってな)』など(などとは)、うちかすめ申さるる折ははべらずなむ(六条院は少しも申し漏らしなざる時は御座いません)。 *「まかり入る」については、注に<『集成』は「まかる」は、ここは、他の動詞の上にそえて謙讓表現とする言い方。男性用語である。以下、「あひだ」「大小のこと」も男性用語」と注す。>とある。この「入る(いる)」は<水準域に達する>ということのようで、「年まかり入る」はざっと<長じる>。 *「いにしへの～」は注に<源氏の詞を引用。>とある。確かに、相当に分かり

難い主語省略だ。朱雀院の手前、父院への敬語を控えようとする言い回しなのだろうか。敬語からの主語判断もし難く、内容は然して複雑でもなさそうだが、読み辛い文だ。

『かく朝廷の御後見を仕うまつり*さして(このように朝廷の御後見を臣下として仕えるのを中断して)、静かなる思ひをかなへむと(静かな暮らしを望む思いを適えようと)、ひとへに籠もりぬし後は(偏に家に籠もり居てからは)、何ごとをも(政務は一切)、知らぬやうにて(与り知らぬようにして)、*故院の御遺言のごともえ仕うまつらず(故院の御遺言の如くにも帝にはとてもお仕え申せず)、*御位におはしましし世には(また朱雀院の御在位中は)、齡のほども身の*うつはものも及ばず(経験も才能も及ばず)、かしこき上の人びと多くて(優れた上官の方々が多くて)、その心ざしを遂げて御覽ぜらるることもなかりき(自分の考えを示して成果を御覽に入れることもなかった)。今(今や)、かく政事を去りて(こうして政務を離れて御退位なさり)、静かにおはしますころほひ(静かにお暮らしの此の頃は)、心のうちをも隔てなく(心の内を思うままにと)、参りうけたまはらまほしきを(参上してお話しを伺いたい所を)、さすがに何となく*所狭き身のよそほひにて(さすがに准上皇位となつては何となく窮屈な立場で出かけるにも礼装を要するので)、おのづから月日を過ぐすこと(どうしてもつい出そびれて月日を過ごしてしまいます)』 *「さす」は「止す」で四段活用の接尾動詞とあり<動詞に付いて途中でやめる意を表す>と古語辞典に説明される。「さす」は一般に連続した状態・状況の途中で別の事象を差し挟む語感で、接尾に付けた場合は特に<中断>を示す、ということらしい。「仕うまつりさして」は注に<源氏が太政大臣から准太上天皇になったことをいう。>とある。 *「故院の御遺言のごと」は注に<故桐壺院の遺言、「賢木」巻(第二章一段)に見える。冷泉帝を後見するようにとの内容。>とある。 *「みくらみにおはしましし世」は注に<主語は朱雀院。源氏、二十一歳から二十八歳まで、朱雀帝在位八年間。「葵」から「滯標」まで。>とある。 *「器物」は<器量、才能、能力>。 *「所狭き身のよそほひ」は注に<隠退の身とはいえ、准太上天皇ゆえの窮屈な身の上であることをいう。>とある。

となむ(どのように父院は)、折々嘆き申したまふ(時々嘆き申しなさいます)」

など(などと源君は)、奏したまふ(朱雀院に奏上なさいます)。

二十にも(にじふにも、二十歳にも)まだわづかなるほどなれど(まだ少し足りない年齢だが)、いとよくととのひ過ぐして(源君はとても良く成人して)、容貌も盛りに匂ひて(姿形も元気潑刺として)、いみじくきよらなるを(非常に美しいのを)、御目にとどめてうちまもらせたまひつつ(朱雀院は御目に留めてじっと御覽あそばしながら)、このもてわづらはせたまふ姫宮の御後見に(この御懸案としていらっしゃる姫宮の御相手に)、これをやなど(この者は如何だろうかなどと)、人知れず思し寄りけり(内心でお考えになっていました)。

「太政大臣の(おほきおとどの、藤原殿の)わたりに(邸に)、今は住みつかれにたりとな(今は住み着かれたそうですね)。年ごろ心得ぬさまに聞きしが(長年思いが実らないように聞いていましたが)、いとほしかりしを(同情していて)、耳やすきものから(喜んでいるものの)、さすがにねたく思ふことこそあれ(その反面で残念に思うことも在るのです)」

とのたまはする御けしきを(と仰る院の御様子を)、「いかにのたまはするにか(残念とは何のことを仰っているのだろうか)」と、あやしく思ひめぐらすに(源君は分からずに考えると)、

「この姫宮をかく思し扱ひて(こちらの姫宮の縁組を御心配なさって)、さるべき人あらば(適当な相手があれば)、預けて(任せて)、心やすく世をも思ひ離ればや(安心して出家なされたら良いのに)、となむ思しのたまはする(どのようにお考えになって仰っているのだ)」と、おのづから漏り聞きたまふ便りありければ(今までにもそれらしい事を漏れ聞きなされた近況の知らせがあったので)、「さやうの筋にや(その筋に違いない)」とは思ひぬれど(とは思いつたが)、ふと心得顔にも(迂闊に呑込み顔をして)、何かはいらへきこえさせむ(如何など返事のしようありません)。ただ、

「はかばかしくもはべらぬ身には(甲斐性無しな者でして)、寄るべもさぶらひがたくのみなむ(妻も遣り繰りに苦労しております)」

とばかり奏して止みぬ(とだけ申し上げるに止めました)。

[第五段 朱雀院の夕霧評]

女房などは(院の側仕えの女房などは)、覗きて見きこえて(源君の様子を覗き見申して)、

「いとありがたくも見えたまふ容貌、用意かな(本当に優れたお顔立ちと態度だこと)」

「あな、めでた(ああ、素晴らしい)」

など、集りて聞こゆるを(集まって申すのを)、*老いしらへるは(老い込んだ古女房は)、 *「おいらふ」は「老い痴らふ」とも表記されく [動ハ四] 年をとってばける。もうろくする。>と大辞泉にある。ただ、此処では<呆ける>は言い過ぎで、老いが進んで「老獺さ」や「重み」を失って、気力体力共に衰えた状態として<老い込む>くらいを考えたい。

「いで(いえ)、さりとも(そうは言っても)、かの院のかばかりにおはせし御ありさまには(かの六条院源氏殿の今の源君ほどの御歳でいらしたときの御様子には)、えなずらひきこえたまはざめり(中納言殿はとても並び申しなされません)。いと目もあやにこそきよらにものしたまひしか(それは目も眩むほどの美しさでいらっしゃったのですから)」

など、言ひしろふを聞こしめして(申し合うのを院はお聞きあそばして)、

「まことに(本当に)、かれはいとさま異なりし人ぞかし(彼はとても抜群の人だったぞ)。今はまた(今は更に)、その世にもねびまさりて(あの時以上に立派になって)、光るとはこれを言ふべきにやと見ゆる匂ひなむ(光るとはこういうものを言うべきなのかと見える内実が)、いとど加はりにたる(ますます加わっている)。

*うるはしだちて(正装した)、はかばかしき方に見れば(その高官ぶりを見れば)、いつくしくあざやかに(威厳があって美しく)、目も及ばぬ心地するを(見るからに及ばない気にさせられるが)、また(一方で)、うちとけて(親しく)、戯れごとをも言ひ乱れ遊べば(冗談を言って寛いで楽しめば)、その方につけては(そういう場面では)、似るものなく愛敬づき(この上なく屈託無く)、なつかしくうつくしきことの(気持ちが通じて仲良くできることの)、並びなきこそ(並ぶ者が無

いことこそ)、世にありがたけれ(世にも珍しい)。何ごとにも前の世推し量られて(何事にも前世の良縁が思われて)、めづらかなる人のありさまなり(愛すべき人柄だ)。*「うるはしだつ」は大辞泉に「麗しだつ」と表記され<[動タ四] 礼儀正しく振舞う。また、まじめぶる。>と説明される。また、此処の文は注に<『集成』は「威儀を正して、公事に携わっているところを見ると」。『完訳』は「表だった公事にたずさわっているところをみると」と訳す。>とある。「うるはしだちて」は下の「うちとけて」との比較構文に於いての対語条件であり、「うるはし」は古語辞典に<端然としている>とあるので、それを「立つ(前面に出す)」のだから、「うるはしだつ」は<正装して>で良さそうだ。「はかばかし」は<大量の仕事をこなす→有能だ>だから「公事に携わっている」というのも妥当に見えるが、「方に見れば」の「方」を<仕事振り>と取るのは何となく小者っぽい。「はかばかし」は以前の語用で<立身出世>の意味に使われてもいたので、此処でも<高官振り>と取りたい。

宮の内に生ひ出でて(六条院は幼少時から宮中で暮らし育ち)、帝王の(ていおうの、父帝が)限りなくかなしきものにしたまひ(この上なく可愛くお思いになさって)、さばかり撫でかしづき(あれほどに身近に御育てになり)、身に変へて思したりしかど(命に代えて守りたいと御思いでいらしたが)、心のままにも驕らず(本人はその引き立てに慢心して尊大に振舞うこともなく)、卑下して(謙虚にして)、二十がうちには(二十歳前には)、納言にもならずなりにきかし(太政次官である納言にもならなかったものだ)。*一つ余りてや(二十一になってからか)、宰相にて大将かけたまへり*けむ(太政官の参議にして筆頭側近の近衛大将を兼任なさったかと思う)。*「一つ余りてや」は<二十一歳になってからだったか>という言い方だろうが、花宴巻での二十歳宰相中将時代の春二月から三月に掛けての尚侍君との色遊びの話から、次巻の葵巻では一章一段冒頭から「世の中かはりて後」と既に桐壺帝から朱雀帝に譲位された後の晩春ないし初夏くらいの記事から始まっていて、年立てでは時に源氏二十二歳とされ約丸二年間の空白があり、その間にあったらしい大将就任についての言及なのだろう。この花宴巻と葵巻の間には、朱雀帝への譲位だけでなく、その入内を控えていた有明の君と情交した光君のその後の動向と、それに連動したであろう葵の上や六条御息所との関係変化や、紫君の成長振りなどなど、相当に重要な状況変化の話が飛んでいて、葵巻には面喰うと言うか、その展開に追いつけずに読み下すのに酷く苦しんだ記憶がある。当時のノートを見ても、その時の私の混乱振りが現れているし、今読み直してもやはり分かり難い。光君の人物像を立体的に語ったであろうこの時期の脱稿は相当に罪深く、何誰かの悪意さえ強く疑わしい。*「けむ」は「や」に対応した推量ないし曖昧表現だが、官位は公式のものだから客観事実としての確かさは揺ぎ無い筈で、これは<光君の宰相大将>が朱雀院が当事者として自ら下した人事ではない、ことを意味していると思われる。朱雀邸の即位と同時期の桐壺帝の人事だったのだろう。それが光君二十一歳のことだった、ということのようだ。

それに(それに対して)、これはいとこよなく進みに*ためるは(この源君はこの上なく昇進しているのは)、次々の子の世のおぼえのまさる*なめりかし(偉大な親の恩恵に、その子孫が与って周囲の評判が高くなったものなのだろう)。まことに賢き方の才(その真に賢明な政策判断と)、心もちゐなどは(立場のわきまえなどは)、これもをさをさ劣るまじく(こちらも決して父殿に劣らず)、あやまりても(至らないことがあっても)、およすけまさりたるおぼえ(経験を積むほど立派になっているという評判は)、いと異なめり(格別に高いようだ) *「ためり」は「たるめり(たり)+「めり」、~しているようだ)の音便「たんめり」の「ん」を省記したもの、と古語辞典にある。 *「なめり」は「なるめり(「なり」+「めり」)、~なのだろう)の音便「なんめり」の「ん」を省記したもの。

など、めでさせたまふ(六条院と納言君をお褒めあそばします)。

[第六段 女三の宮の乳母、源氏を推薦]

姫宮のいとうつくしげにて(朱雀院は姫宮のとても可愛らしげで)、若く何心なき御ありさまなるを見たてまつりたまふにも(幼く無邪気な御様子なのを拝し申しなさるにも)、

「*見はやしたてまつり(そなたを大事にし申し上げて)、かつはまた(一方ではまた)、片生ひならむことをば(半人前の幼さに付いては)、見隠し教へきこえつべからむ人の(庇ってそっと教え申し上げるような人の)、うしろやすからむに預けきこえばや(安心できる所にお任せ申したいものだが)」 *「見はやす」は<見て称える>でもあるようだが、此処の「見る」は<世話をする>ということだろうから、「はやす(榮やす、囃す)」は<盛り立てる>で、この「見はやす」は<贅沢させて面倒を見る>という語感で、均して言えば<大事にする>。

など*聞こえたまふ(などと話し聞かせ申しなさいます)。 *「聞こえたまふ」は注に<「聞こゆ」は謙讓の意を含んだ本動詞。朱雀院が女三の宮に向かって申し上げる>とある。従う。

大人しき*御乳母ども召し出でて(院は分別のある御乳母たちを御呼び出しなさり)、御裳着のほどのことなどのたまはするついでに(御裳着を準備するようにと申し付けなさる序でに)、 *朱雀院の上臈は公卿筋以上だろうが、特に乳母は王家筋の女たちだ。

「*六条の大殿の(ろくでうのおとどの)、式部卿親王の女(しきぶきやうのみこのむすめ)生ほし立てけむやうに(おほしたてけむやうに)、この宮を預かりて育まむ人もがな(このみやをあづかりてはぐくまむひともがな)。 *「六条の大殿の～」は注に<以下「人にこそあめるを」まで、朱雀院の詞。>とある。内容は「六条院が紫の上を育て上げたように、この姫宮を預かって育てられる人がいないだろうか。臣下の中には適任者が見当たらない。と言って、後宮には中宮以下名門の女御たちがいて、有力な後見も無しにこの宮を御所に入内申しても、とても互角に張り合えないだろう。源中納言が独り身で居た時に打診して置くべきだった。若いが目覚しく将来が見込まれる人のようだからな」というところのようだが、王家の身内の女たちに向かって、朱雀院がどういう言い方をするのか、は相当に興味深く、作者は王家筋では無く藤原氏だが、中宮彰子に仕えたのだから、その実態に肉薄できる立場には居たと目され、此処はその原文の読みに注目したい。

ただ人の中には在り難し(ただうどのなかにはありがたし)。内裏には中宮侍ひ給ふ(うちにはちゅうぐうさぶらいたまふ)。*次々の女御たちとても、いとやむごとなき限りものせらるるに、はかばかしき後見なくて、さやうの交じらひ、いとなかなかならむ。 *「次々の女御たち」は注に<冷泉帝後宮には、秋好中宮(源氏養女)、弘徽殿女御(太政大臣女)、王女御(式部卿宮女)、左大臣女御(「真木柱」巻)等がひしめいている。>とある。

この権中納言の朝臣の(このごんのちゅうなごのんのあそんの)独り在りつるほどに(ひとりあるつるほどに)、打ち掠めてこそ(うちかすめてこそ)試みるべかりけれ。若けれど、いと警策に(いときやうざくに)、生ひ先頼もしげなる人にこそあめるを」

とのたまはず(と仰います)。

「*中納言は(臣下たる源中納言は)、もとよりいとまめ人にて(元々とても真面目な人で)、年ごろも(何年も)、かのわたりに心をかけて(あの藤原姫を心に掛けて)、ほかざまに思ひ移ろふべくもはべらざりけるに(他の女に心移りをする様子もなかったのですから)、その思ひ叶ひては(その思いが適った上は)、いとど揺るぐ方はべらじ(ますます別の縁談に心を動かす筈も御座いません)。」 *「中納言は～」は注に<以下「聞こえたまふなれ」まで、乳母の詞。>とある。姫宮の乳母が源君を「中納言」と呼んでも失礼に当たらない、というのが私には良く分からない。勿論、私ごときに雲上世界の何某かの分かれろ筈も無いが、何となく<納言の君>くらいが穏当に感じられる。姫宮を称える立場ということかも知れないが、「中納言は」「はべらざりける」などという言い方は上から目線だし、尊大な物言いだ。王家筋の者でも源君ほどの者に対しては、六条院の子息でもあり本人も高官なのだから、敬語遣いが普通に思えるが、それこそが王族と臣下の違いなのだろうと、あえて補語する。

かの院こそ(でも、その父殿の六条院こそ)、なかなか(むしろ)、なほいかなるにつけても(今なおどういふ相手にでも)、*人をゆかしく思したる心は(人肌を恋しくお思いに成る性癖は)、絶えずものせさせたまふなれ(変らず御持ちでいらっしゃるようです)。その中にも(特に)、やむごとなき御願ひ深くて(王家筋への御思い入れが深くて)、前斎院などをも(さきの斎院などまでも)、今に忘れがたくこそ(今もって忘れ難いとあって)、聞こえたまふなれ(お手紙を差し上げなさって居るそうです) *「人をゆかし」は最も広く取れば<人を知りたがる>だが、此処の文意からすれば<人肌を求める>と取らないと意味を成さない。ところで、今ひとつ分かり難いのは、この場の空気感だ。姫宮の将来についての相談事なのだから雑談の筈はないが、この乳母の言い方からは深刻な雰囲気よりは和やかさを感じる。勿論、縁組に色事は欠かせない重要事項には違いないし、乳母がその話題を真顔で取り上げることは真剣さの表れとも思えるが、父院とは三歳しか違わない叔父院である四十男の源氏殿を13歳の姫の婿に、一体どれ程の現実感を持って提案しているのか、冗談半分とは思えないが、話の流れから考えられる可能性の一つを上げてみたくらいのもので、この時点で乳母が本命と確信して源氏殿を推挙しているようには思えない。というか、作者はそういう場面描写をしているような気がする。是が王朝だと示しているかの印象だ。

と申す(と御乳母が申します)。

「いで(いや)、その旧りせぬ*あだけこそは(その変らぬ好色心は)、いとうしろめたけれ(とても心配だが)」 *「あだけ」は「徒気」で<浮気な行為。浮気心。>と大辞泉にある。ただ是は、姫の開通を六条院に仕上げてもらうのだから情交するのは当然で、六条院が好色なのが「うしろめたし」の筈はなく、御息所仕込みの六条院の濃密な性戯に姫が溺れて、嗜みを忘れるほど淫乱になっては困る、という冗談だ。やはり院は、少なくともこの時点では、乳母の話を真に受けてはいないようだ。が、しかし、言外に尚侍君がそうだった、という味わいが滲んで、それが院に思惑を促すか。更に言えば、朱雀帝は尚侍君の体と反応と、その上での歌詠みや諸所作によって、王家の秘儀その真髓・価値を実感したのかも知れず、それが疫病の流行と台風被害に喘ぐ都の困窮を救う王家の奥の手として、光君の政界復帰を朱雀帝に決断させた、という穿った見方も出来そうだ。

とはのたまはすれど(とは仰るものの)、

「げに(確かに)、あまたの中にかかづらひて(六条院の多くの御部屋方と関わって)、めざましかるべき思ひはありとも(驚くようなことがあったとしても)、なほやがて親ざまに定めたるにて(六条殿がやはり他ならぬ親代わりに定まった姫の運命なのだと)、*さもや譲りおききこえ

まし(妻としてお任せ置き申すのが良いのだろうか) *「さもや~まし」はくそのように~したものでらうか、~した方が良いのだろうか>。

なども(などとも院は)、思し召すべし(お考えになったようです)。

「まことに(本当に)、少しも*世づきてあらせむと思はむ女子持たらば(少しでも人並みに幸せになって欲しいと願う女子を持つ親ならば)、同じくは(どうせなら)、かの人あたりにこそ(あいう人のところにこそ)、*触ればはせまほしけれ(近づけさせたいものだ)。 *「世付く」はく世間並み>と古語辞典にある。ただ、「あらせむ」はく成って頂きたい>だから、世間並みになって欲しい、という水準よりは、人並みに幸せになって欲しい、という親心かと思う。「思はむ」の「む」は、言ってみれば「思ふ」の仮定形で、是を敢えて現代語で言い換えれば<思うであろうところの>だが、現代日本語ではこうした仮定形式は廃れていて、単に<思う、願う>を使う。古語が知識階級者たちの言葉の所為で妙に形式に煩いのか、現代語が重要な論理を見落としているのかは、今の私には判断できないが、「む」「らむ」は結構難しい。 *「触ればふ」は「触れ延ふ」なのだろうか、が、そう表記した辞書はない。意味は<触れ寄る、触れる、近付く>と古語辞典にある。

いくばくならぬこの世のあひだは(長くも無い人生は)、*さばかり心ゆくありさまにてこそ(あの六条院のように満ち足りた姿で)、過ぐさまほしけれ(暮らしたいものだ)。 *「さばかり心ゆくありさま」は注に<六条院(源氏)のように満ち足りた暮しをして過ごしたいものだ、の意。>とある。

われ女ならば(私が女なら)、同じはらからなりとも(同じ兄弟と言えども)、かならず*睦び寄りなまし(必ず体を寄せ合う仲になったらう)。若かりし時など(若かった時などは)、*さなむおぼえし(そう感じたものだ)。まして女の*欺かれむは(まして女が浮かれ気分させられるのは)、いと(もう)、ことわりぞや(当然のことだ) *「睦び寄り」は<親しく近付く>で、具体的には<体を結ぶ>以外には無く、源氏殿が誰にでも臆面も無くこういうことを言わせる程の艶やかさだったのかも知れないし、王朝の典雅な余裕ある生活感の中にあっては普通の言い方かもしれないが、実際に男色や近親相姦も間々行ったかの世情からして、院がこれを言うのはやはり軽口調なのだろう。 *「さなむおぼえし」はいよいよ冗句だ。いや、本当にそう感じたかも知れないからこそ、気を緩めた軽口だ。などと口濃いノートをするのは、やはりこの場面の重さ軽さの分かり難さがあるからだ。この院の言い方で場が大爆笑したのなら現代風で分かり易いが、とは言え場の軽さは難局を打開する重要議事を円滑に進める常套手段で古典的な工夫だが、此处ではどうも淫靡な艶笑の中で重要事項が醸成されて行く、それ自体は市井の日常だが王家でも同様なのかとの、印象を受けて少し戸惑う。いやしかし、重大事が日常ということこそが王朝なのだろうか。と、下に「尚侍の君の御ことも思し出でらるべし」と明示されていて、私は少なからず驚いた。濡標巻一章二段の朱雀帝と尚侍の濃厚な濡れ場は、その時点では幾分唐突な印象を受けたが、此处に繋がっていたのだ。いや、作者は何もこの場面の為にあの濡れ場を描いたのでもなからうし、初めからそういう全体構想で語られていたことを、此处で改めて再確認させられた私の驚きだ。そして多分、描かれているのは構想の緻密さではなく実相の面白さなのであり、原文の脱稿や散逸が無ければ、時代考証などは別にして筋としては、本来はもう少しは解かり易く書かれたものだったのだろう。 *「あざむく」は<騙す>ではない。「あざ」は「あだ(徒)」に通じて<遊び、浮ついた気持ち>の語感で、「むく」は<そういう方向に向かう>だから、「あざむく」は<興に乗る、調子付く、浮かれる>。

とのたまはせて(と仰られて)、御心のうちに(院は御心の内に)、尚侍の君の御ことも(尚侍君が光君と通じたことも)、思し出でらるべし(思い出されていらしたようです)。